茜色の歌姫

第六部　壬申の乱

是天皇（すめらみこと）、高市皇子に謂（かた）りて曰（のたま）はく、「其（そ）れ近江朝には、左右大臣、及び智謀（かしこ）き群臣、共に議（はかりごと）を定む。今朕（われ）、與（とも）に事を計る者無し。唯幼（いとけなく）少（わか）き孺子（こども）有るのみなり。奈之何（いかに）かせむ」とのたまふ。皇子、（中略）奏（もう）言さく、「近江の群臣、多なりと雖（いふと）も、何ぞ敢えて天皇の霊（みかげ）に逆（さから）はむや。天皇独りのみましますと雖も、臣高市、神祇（あまつかみくにつかみ）の霊に頼（よ）り、天皇の命を請けて、諸

壬申の乱（想像模型）

将を引率て征討たむ」（中略）天皇誉めて、手を携り背を撫でて（中略）鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

（『日本書紀』巻第二十八）

第七章　不破の払暁

672

不破にある大海人皇子の仮宮は、広々とした野のなかに置かれていた。

後の世に、関ヶ原と呼ばれるその野は、笹尾山、桃配山、松尾山、伊吹山、南宮山と呼ばれる低くなだらかな山に囲まれ、まばらに田を耕す民の苫屋があるのみであった。九百二十八年の後、徳川家康と石田三成に率いられた数万の軍がこの地で戦い、天下を争う事になると知るよしもなく、静かに治まっていた地に、白木の肌も生々しい宮が建てられ、その周りを柵が囲み、幾千の兵が幕舎を並べた。

ひっきりなしに駅馬や徒歩の兵が出入りし、仮宮の大海人皇子の室に届けられた。

汗みどろになって報せを告げる兵にうなずく皇子の傍らで、讃良皇女は、広げた地図の上に、兵の配置を示す小石を動かしていた。

「高市皇子の差配の見事さよ」

報せを述べたばかりの兵が下がるのを見送り、讃良皇女はつぶやいた。

「孫子の兵法にもかなう。頼もしきかな」

「讃良に褒められれば、高市皇子も喜ぼう」

笑ってうなずく皇子に、讃良は一瞬、面差しを引き締め、言った。

「やがては、草壁皇子を輔け、国をよき方へと導こう」

大海人皇子は口を噤んだ。
讃良皇女は優れて頼もしい妃だが、ただひとつ、大海人皇子が生ませた数多の皇子皇女が、己が子、草壁皇子がやがて天皇の御位に即く妨げになることを気に掛けすぎる。高市皇子を褒める言葉にも、棘のような冷ややかさが混じっていた。
「讃良よ」
大海人皇子は言った。
「誰にもまして頼もしきは汝……。この国をよき方へ導くは汝が務め」
「天皇を宣した皇子にも似合わぬ言葉かな」
讃良皇女は、地図の上の小石を動かしつつ言った。
「されど……」
いたずらっぽく笑みつつ、讃良皇女は続けた。
「気弱な皇子を支えねばと、かく皆に思わせる皇子の狡さよ」
狡さよ……。鋭い針で胸を突かれたようであった。大海人皇子は、苦い笑みを浮かべるしかなかった。讃良皇女は喉を鳴らして笑った。
「さような皇子ゆえ、多くの女が寄り来る。吾が心は安まらぬ」
そのとき、仮宮の外で歓声があがった。腰を浮かせた大海人皇子と讃良皇女に、兵どもの声が響いた。
「倭媛皇后と十市皇女、来たまえり！」

仮宮の前庭と呼んではいたが、均されてもいない地面を急ごしらえの柵で囲ったばかりの空き地に、兵や舎人、女嬬どもが、幾重もの輪をなしてぎっしりと居並んでいた。輪の中央に、倭媛皇后と十市皇女が、運ばれた椅子に座し、その背後に、黒い甲冑を着込んだままの土蜘蛛どもが膝を突いていた。
「木幡！」
仮宮の屋より駈け出でた讃良皇女は、飛ぶように走り、皇后に抱きついた。
「よくぞ、生きてあった！」
一月の押し込めに痩せた首にしがみつき、すがりつく讃良皇女の肩を撫でさすりつつ、倭媛皇后は、貌じゅうを綻ばせて言った。
「讃良が吾がために建てる宮の庭の池で遊ぶまでは、死なぬ」
讃良皇女の膝が崩れた。地に膝を突き、皇后の腰にすがって泣いた。
そう……。　十四年前、ともに十三だったあの頃、香具山でそう誓った……。
「大海人皇子よ……」
皇后は、すすり泣く讃良皇女をかき抱きつつ、大海人皇子に眼をやった。
「十市皇女も無事に」
仮宮の階梯を降り、庭に立った大海人皇子の前に、十市皇女は膝を突き、頭を垂れた。
「十市よ……」
大海人皇子は、自らも膝を突き、十市皇女の肩を掴んで言った。
「よくぞ耐えた」

十市皇女は肩を震わせ、流れる涙をぬぐい、貌を上げた。その唇に笑みが浮かんでいた。
「父なる皇子よ、吾は耐えた。母なる人が、常に側にあった故に」
「額田郎女が？」
「然り！」
立ち上がり、踵を返して背後を指さし、十市皇女は叫んだ。
「母なる人はあれに！」
だが……、そこにいるはずの、黒い甲冑に、貌を白布で覆った額田郎女の姿はなかった。
共に瀬田より駆けてきた土蜘蛛の結奈と瀬莉は、途方に暮れたように貌を見合わせていた。
「瀬莉……」
結奈は口を開いた。
「郎女は……確か、さきほどまで、ここにいた」
「いた」
瀬莉も、ひとびとの眼差しに戸惑いつつ、言った。
「いつの間に……いずくへ……」

その夜。
仮宮で宴が開かれた。
広間には、大海人皇子、倭媛皇后、讃良皇女、十市皇女、多くの舎人や女嬬どもが集い、前庭では宮を守る兵どもに酒肉が配られ、篝火もあかあかと賑わった。

この御酒を
醸みけむは
人に非ず

十市皇女は、歌い、舞っていた。

猿が醸みて
深山の
木の洞に貯めし
この御酒を

……十市が十一歳のとき、狂心の渠の興事の場で披露した歌。
大海人皇子は、酒杯を口に運びつつ、十四年前の景色を脳裡に蘇らせた。
明らかに朗らかだった女童の頃と同じ面差しで、ひとびとの笑みに包まれ、十市皇女は澄んだ声音を響かせ、四肢を軽やかに動かしていた。

歌いつつ
舞いつつ

あやにた愉し
この酒

その歌に、舎人や女嬬どもが和した。

あやにた愉し
この酒

そう……。宝大王が始めた狂心の渠の興事。多くの壮丁が懲され、多くが苦役に命を落とした場を、額田郎女は、人々が舞い踊り、働きつつ学ぶ場へと変えた。ひとびとの歓びの輪のなかに、女童であった十市皇女がいた。

津軽での酷い出来事、大友皇子に受けた辱め、そして、内裏への押し込め。

辛いことの多かった十四年の歳月を乗り越え、かつての十市皇女が、再び還ってきた。

すでに、近江より報せが届いていた。瀬田の軍に敗れた大友皇子は、近江へと逃げ、内裏の裏山で自ら首を縊った。大友皇子のもとで権勢を振るった中臣金は斬られて死に、巨勢比等や紀大人は捕らえられた。蘇我安麻呂が預かった十市皇女の子、葛野皇子は無事、不破へ向かいつつある。

勝利を華やかに、十市皇女は歌舞で彩った。

皇子の傍らに座す讃良皇女がつぶやくように言った。

「十市皇女は、人の心を朗らかにする……額田郎女と同じく」

そして、やや寂しげに付け加えた。

「吾にその才はない」

「されど……」

大海人皇子が如何に応えるか迷っている裡に、倭媛皇后は、耳ざとく讃良皇女の言葉を聞きつけ、酒でほんのり赤みの差した貌を向けた。

「讃良は、皇子とともに国を統べる者。十市皇女の才をよく使え」

「木幡」

讃良皇女は、膝を進めて皇后ににじり寄った。

「汝も……皇子を輔けて、ともに国を統べよ」

「吾は政事には向かぬ。国を統べるより、讃良と遊びたい」

皇后は、讃良皇女の肩を抱きつつ、大海人皇子を見やった。

「皇子よ、讃良を政事にばかり専らにさせず、時には吾と遊ばせたまえ」

皇子は笑って頷いた。舎人や女嬬どもが手を打ち鳴らし、舞い終えた十市は、足取りも危うく、二歩、三歩すすみ、座り込んだ。

「酔うた」

定まらぬ眼差しを宙に浮かせつつ、十市皇女は言った。

「眠い……」

「皇子よ」

倭媛皇后が言った。
「政事を称制する吾が最後の詔である。汝が手で十市皇女を寝屋へ運べ」

父に抱きかかえられ、十市皇女は寝屋に運ばれた。大海人皇子の肩に左右の腕ですがり、息を弾ませていた。
「されば」
寝屋の褥に身を横たえた皇女に、大海人皇子は言った。
「よく寝め」
「否」
十市皇女は身を起こし、居住まいをただして座り、随ってきた二人の女嬬に、退がるよう命じた。
女嬬が去った後、十市皇女はしばし唇を噛みしめ、やがて口を開いた。
「父なる皇子よ」
強張った皇女の面差しに、大海人皇子は口を噤み、聞き入った。皇女は言った。
「何故に、母なる額田郎女が、ここにいないのか……」
胸を突かれた。
近江より、皇后や十市皇女とともに不破に駈け来たはずの郎女は、仮宮を前にして姿を消した。皇后も十市皇女も、二人の土蜘蛛どもも、いつ、どのように額田郎女が去ったのか、気づかなかった。

大海人皇子は、舎人どもや兵をして、郎女を探させた。見つからぬまま宴となった。祝いの宴を妨げぬよう、誰も額田郎女のことを口にしなかった。十市皇女もまた、母のことを忘れたげに、歌い舞った。だが、宴に侍った誰もが、額田郎女の不在を訝しみ、心の惑いを隠しきれずにいた。
十市皇女は続けた。
「何故なるか……」
その眼から涙があふれていた。
「母は……内裏の誰にも気づかれずに吾の側にあるため、その貌を、自ら傷つけた」

額田郎女が……。
自ら、その貌を？
大海人皇子は、膝を手でつかんだまま動けなかった。

「父よ」
涙を拭った十市皇女は、晴れやかな笑みを浮かべたのに、大海人皇子は気づかなかった。
「もはや母は、かの美まし母ではない。それでも……」
剣で三筋、深々と……。その傷を負った面差しを、大海人皇子は思い浮かべられなかった。己が産んだ娘のためとはいえ……。
「父は、母を恋うるや？」

静かな十市皇女の声が、大海人皇子の混濁した脳裡を、現へと戻した。
「恋うるや？」
笑みを消して重ねて問う十市皇女に、大海人皇子は応えた。
「皇女よ。額田郎女は、思い煩っていた。津軽で、汝を守れなかったことを。豊璋王子の言うままに、汝を大友皇子の妃としたことを」
皇女は、深く頷いた。大海人皇子は続けた。
「それ故、この度は、己が貌を傷つけても、汝を守り抜いたのであろう」
皇女は泣かなかった。嬉しげに、眼を細め、唇を広げて笑った。
「たとえ貌を傷つけても、吾は……」
皇子は、声を振り絞った。
「汝が母を……恋うる」

しばし物語りを重ねた後、大海人皇子は十市皇女の寝屋を出で、仮宮の広間、宴の場に戻った。広間には、誰もいなかった。すでに膳は片付けられ、がらんと静まりかえっていた。
大海人皇子は、床に座した。
独り腕を組み、凝然と、ほのかに闇を照らす灯火を見つめた。
額田郎女は、傷ついた貌を、誰よりも恋うる父なる皇子に、見せたくないのであろう。十市皇女はそう言った。故に、姿を消したのであろうと。
果たして……、皇子は思った。傷ついた額田郎女の貌を、まざまざと見ることができるであろ

うか？
伊勢の浜の洞で会ったとき、亜那と呼ばれていた郎女は、小枝のように細い胴に、藁しべのような手足、硬い蕾であった。皇子の宮に初めて忍んできた亜那の「米は甘い！」と言いつつ見せた笑みは、美しかった。
様々な苦難を味わいつつ、郎女はその心を萎えさせることはなかった。常に、心を強く保ち、立ち向かった。郎女の美しさは、その心映え……。
そう思っていても、やはり、剣傷が穿たれ、醜く引きつったという郎女の貌を、まともに見ることができるだろうか？
吾は勝った……。勝ってなお、皇子の心は晴れなかった。

「皇子よ」
独り広間に坐す大海人皇子の背後に、讃良皇女が立っていた。手にした小さな甕と杯を皇子の前に置き、酒を注いだ。
「寝まれぬは……額田郎女がいないからか？」
その面差しは、穏やかだった。声音にも、常のような棘を含んだ鋭さはなかった。
「応えたまわずともよい。この度の勝ちは、額田郎女の功勲。吾も、たびたび郎女には助けられた。そもそも、額田郎女が、山田寺で、qだった吾を救うてくれなかったら……」
二十三年前、四歳だった讃良の祖父、蘇我倉山田石川麻呂は謀叛の罪を着せられ、山田寺に籠もり、一族もろとも自刃して果てた。讃良も、母の美濃津子の手で刺される寸前であった。土蜘

蛛として潜(ひそ)んでいた額田郎女が、美濃津子を説き、讃良を託され、育んだ。
「深く謝している」
讃良皇女はつぶやき、自らの杯にも酒を注ぎ、飲み干した。
「皇子よ、今宵(こよい)は、ここにて寝みたまえ」
帯を解き、袍(ほう)を脱いで褥(しとね)を作り、讃良は立ち上がった。
「吾が寝屋にては、額田郎女も忍び来ることはできまい。故に今宵は独り、寝みたまえ」
これは目覚めたときに。
讃良皇女は立ち上がり、室の隅に置かれた水の甕(かめ)に木の椀(わん)を差し入れて掬い、皇子の傍らに置いた。
そのまま、讃良皇女は去った。
杯を手にしつつ、大海人皇子は、天井の梁(はり)を見上げた。
そこに額田郎女が潜んではいまいか……。
だが、讃良皇女は去ってしばし後も、誰も広間には現れなかった。皇子は寂然(じゃくねん)と、酒杯を重ねた。

ささら……。
ささら……。
ささらの姉！
稚(おさ)ない乙女の声であった。

これは……、そう……五歳の十市皇女。
河辺宮(かわらのみや)の庭で、五歳の十市皇女と七歳の讃良皇女が向かい合って立っていた。十市皇女は、鞠(まり)を胸に抱え、涙ぐんでいる。
ささらは、ひどい。
吾は小さい。強く蹴られては、受けられぬ。
涙ぐむ十市の前に、讃良は俯(うつむ)いていた。
ささらは、きらい！
叫んで駆け出そうとする十市皇女の頬を、誰かが叩いた。
十市皇女！
額田郎女が、十市皇女の前に立っていた。
なぜ、讃良と睦(むつ)まぬ。汝(なれ)が姉ぞ。
すすり泣く十市皇女を抱きつつ、額田郎女は、しかり続けた。
そう……。あの折、額田郎女は二十歳になっていたか。馴染まぬ十市と讃良を睦まそうと、懸命に努めていた。
若く、美しかった額田郎女。
その貌(かお)は……。
……何故？
額田の貌が見えぬ。
姿は見える。まとった鮮やかな彩(いろど)りの衣も見える。十市皇女を抱く手も見える。

貌が見えぬ。
何故？
父よ。
十市皇女の声が響いた。
もはや母は、かの美まし母ではない。それでも、父は、母を恋うるや？
四肢を覆っていた讃良皇女の袍をはねのけ、大海人皇子は半身を起こした。
見回すと、不破の仮宮の広間であった。昨夜、勝利の宴が催された広間に、大海人皇子は独り、眠っていた。
額田郎女は……ついに来なかった。
昨夜、十市皇女は言った。母は、醜く傷ついた己が貌を見せたくない故に、姿を消したのかもしれぬ。
されど……、父なる皇子が、それでもなお、母を恋うるのならば、必ず、来る。
そうであろうか……。皇子は、酔いの残る額に手をやった。傍らに水の入った椀が置いてあった。寝覚めた時にと讃良皇女が置いていった椀を手に取り、飲み干した。冷たい水が、乾いた四肢のすみずみを潤した。
すでに灯火は消え、広間は闇に覆われていた。皇子は立ち上がり、庭に出た。闇が青く、夜明けの近さを告げていた。
仮宮を囲む柵の、出入りに使う木戸に、寝ずの兵が数名、篝火を囲むように矛を構えていた。

現れた皇子の姿に、膝をついて拝礼した。
「しばし、外を歩む」
しずかに歩んで木戸を通ろうとする皇子の背後に、兵長に促され、二人の兵士が随おうとした。
「構わぬ」
皇子は手で、退がるよう合図した。
「独り野に立ち、昇る日輪を見たい」
では……。兵長が腰に提げた長剣を外し、皇子に捧げた。せめて、これを。
「諾」
皇子は頷き、長剣を受け取って木戸を出た。
広々とした不破の野は、青闇と朝靄に包まれて静まりかえっていた。それでも、遠くに見える二、三の苫屋から、米を炊く煙が立ち上っている。すでに起きて、日々の生業のために、飯を食うのであろう。
皇子は、炊煙を眺めつつ、夏の暑さに生い茂る草を踏んで歩んだ。
あの苫屋には誰が住むのか。父と母と子らが、床に穿った

不破（岐阜県関ヶ原町）

囲炉裏をかこみ、煮え立つ壷に入れた稗と粟と山菜の粥ができあがるのを、箸と椀を手に待っているのであろうか。

かつて……伊勢にあった時、吾が望んだのは、そのような暮らしではなかったか。亜那がいて、子らがいて、ともに朝の粥を啜る日々。

飛鳥での出来事が脳裡に蘇った。

「まぐわいこそ政事」と唱えた蘇我鞍作は板蓋宮で討たれた。宝皇女は己が弟を排して再び大王の御位に即き、万の民を徴して狂心の渠を掘り、三韓に軍を派した。葛城皇子は宝大王を弑殺し、中臣鎌子の意を受けた安見娘に弑殺された。乱れに乗じて日本の天皇となった百済の豊璋王子は鏡郎女に弑殺された。豊璋王子の子の大友皇子は、倭媛皇后を押し込めて大海人皇子を討とうとして、敗れた。

多くの者どもが覇を争い、敵を倒し、自らも滅びた。血で血を洗う戦いのなか、変わらなかったものは……。

額田郎女よ。

汝は常に、伊勢にあった亜那であった。

たとえ、土蜘蛛として幾人を殺めたとしても、津軽で十市皇女を姦された苦しみに豊璋王子に抱かれたとしても、額田郎女は、伊勢にあった亜那のまま。

伊勢でも飛鳥でも筑紫でも近江でも、その笑みと歌舞で多くのひとびとを慰めた亜那。

吾は……汝を……。

草の茂みのなかに左右の膝を突き、地を這う虫や、小石の陰から生える若芽を見つめていた大海人皇子の傍らで、草を踏む沓の音が、ひそやかに鳴った。

貌を上げると、やや離れて、白い貫頭衣をまとった女が立っていた。

その貌は、白布に覆われていた。

亜那……。

否、額田郎女。

なんと呼ぼう。

汝は、ついに戻ってきた。

額田郎女は、頭の後ろで結んだ髪を解きはなった。風に吹かれ、黒い髪が、弾けたように広がった。

さらに、貌に巻いた白布を外した。

不破の野を囲む山の端に、日輪が貌をのぞかせた。

青闇が払われ、靄のなかに、深々と刻まれた三筋の傷跡も生々しい白い貌が現れた。

皇子よ……。

額田郎女の面差しは、強張っていた。瞬きもせず、息を詰め、大海人皇子を見つめていた。

会いたくなかった。

否、会いたかった。
会いたかった。もとのままの面差しで。
見せたくはなかった。
されど……。
皇子よ。
もう一度、その腕(かいな)に抱かれたかった。
皇子よ。
吾(われ)を抱けるか。

大海人皇子は立ち上がった。
ゆっくりと額田郎女に歩み寄った。
郎女はうつむいた。
皇子の面差しを、見られなかった。
貌に刻まれた傷に、哀れみを浮かべているであろう皇子の面差しを。
皇子の手が、右の腕に触れた。
額田郎女は、四肢をかすかに震わせた。

「亜那」

皇子の声に、額田郎女は貌を上げた。
皇子の貌に浮かんでいるのは、ただ澄んだ笑みだけであった。
ひたすらに、笑んでいた。
皇子の右手は、額田郎女の左の腕を掴み、さらに、左の手が肩に伸びた。
堅く抱きしめた。

その時、額田郎女と大海人皇子の四肢を、互いの身の暖かさが包んだ。
山の端から昇る黄金(こがね)色の日輪の光。
風が揺らす草のざわめき。
鳥の囀(さえず)り。
開けられた苫屋の戸から響く民どもの声。
広やかな不破の野を包むすべての音と光が、抱き合う二人を言祝(ことほ)いでいた。
言祝ぎの歌に包まれ、二人は抱擁したまま動かなかった。